

新しい暮らし、それぞれの秋

酷暑の続いた長い夏も終わろうとしています。この頃は、昼間は30度近くになっても、朝晩は寒いほどです。バター付きパンのおねだりするスズメ達もそろそろ本格的に脂肪を蓄えはじめたのか、コロコロです。それとも、もしかしたら、単にパンの食べ過ぎなのでしょうか。

我が家は、ドリトル先生の73歳の誕生日を境に大きく変わるようです。欧米の大事な行事の一つの誕生日のお祝い、今回は、カルマの交差点のようでした。フランス語の俗語でいえば、どす黒いうんこの中です。

ポーンと何本も抜かれるシャンペン。さあ、ドリトル先生の73歳のお祝いです。細かい泡がグラスからこぼれ落ち、慌ててグラスを追いかけて拭きます。今回のシャンペン係は娘のフィアンセです。慣れない手つきで必死です。美味しいシャンペンなんだから、気をつけて。。。ポーンとやっと蓋が宙を舞いました。周りを見渡すと、なんだか、忘れ物をしてしまったような寂しさが漂っています。

ドリトル先生の次男の姿が見えません。

「どうしたの、まだ家を出てなかった？」思い余って家に電話をしてみると

「ビールス性の下痢で具合が悪いんだ。今、子供達と女房がそっちに着く頃だから。僕は思うところあって、今回無理して出席しないことにしたんだ。」

そんなこととは今まではなかったのに。いったいどうしたことなのでしょう。

「だって、貴方たちそろそろ引っ越しじゃないの。もうゆっくり会えないんじゃないの。」

「まあね。」

義理の次男は、モンリオールから車で9時間、飛行機で1時間ちょっとのニューブランズウィック州のフレデリクトンにある大学の教授職が決まり、新学期からの仕事に合わせてバタバタと引っ越すことになりました。こちらの家を売り、あちらに少し大きめの家を買いました。経済力のある妻の陰に隠れ、妻に従順に暮らし、研究と庭の手入れをして穏やかに、園芸家のように淡々と暮らしていた次男は、ある日敢然と決意したのでした。

「僕は、やはり自分の道に行く。」

家族のこともあり、どこでもというわけにはいきませんが、大学で教え、研究を続けよう、そう決めたようでした。著名な専門誌に大きな三つの記事を掲載し、潮時だったのでしょうか。

急ぐあまり、ドリトル先生の立場を無視することが続き、ドリトル先生はブチ切れ。状況を理解せず嫌味を言うドリトル先生に義理の次男はブチ切れ。ここ、しばらく折り合いの悪かったドリトル先生と次男。どちらにも言い分があり、どちらも折れようとしないので。これから先は、遠距離もあり、コミュニケーションや関係修復にやや時間がかかりそうです。

そんな中でドリトル先生のお誕生日会がありました。もう集合時間はとっくに過ぎ、シャンペンを一飲みしたころ、義理の長男が子供達を連れて現れました。しかもよれよれになって。

「あんまり寝てないんだ。母親に頼みこんで昨夜から子供達と実家に帰っているんだけど、それまで僕は車の中で寝たりしてたんだ。」

義理の長男は1週間ほど前、奥さんに離婚を切り出しました。彼の頭の中では、簡単に運ぶはずだったのです。子供達の両親として、長く一緒に暮らした二人は、別れてもつかず離れず仲良くしていけるはずでした。そうは問屋がおろさず、泥沼状態に即突入してしまったようです。二人はこしばらく折り合いが良くなかったとはいえ、こんなに早急に何も考えずに離婚を切り出してしまうとは、ドリトル先生は深いため息をつくのでした。

「もう少し話し合うとか、」

「もういいんだよ。これ以上一緒にいる気は無いんだよ。新しい暮しをみつけないんだよ。」

そう、ドリトル先生に1週間前に話したようです。その翌日、離婚宣言をしたようです。

その頃、そんなこととは知らずにパーティ出席の確認のメールを長男夫婦にいたら、

「彼女とは昨夜別れたんだ。もう彼女にメールするのは辞めて。」

嫁からは

「彼が子供達と行きます。」

あーなんてことなのだ。

2-3週間前のこと、そんな長男の気持ちを知る由もなく、お嫁さんと私はこんな会話をしたのです。嫁は、

「私って銀のスプーンで育てられてきて(お金の心配の無い、裕福な暮らしという意味です。)親に用意されたレールの上ののり、親の言う通りずっと大きくなって、自分で決めて生きるということをしたことが無いの。もっとしっかり生きるということも教えて貰えば良かったと思っているの。」

そう、辛そうに語るのでした。

「ご両親はしっかり育てたと思うよ。あのわがままな義理の長男に耐えて生きるだけでも大変な努力だから。」

「どうなんだろう。私達、違い過ぎるのよね。私は平々凡々と暮らせればいいの。」

統計学でPhドクターを取得し、今は証券会社に勤め、野心的に人生を駆け抜ける義理の長男の傍では、心穏やかな日は少ないのかもしれないとその時に思ったのでした。お料理も頑張ろうという気はあまりなく、極めてアメリカ的。言葉を変えて言えば、ハンバーガーとピザとスパゲティ以外が余り作る術を知らず、グルメやきちんとした料理は開拓する気はないようです。仕事もお金がそれなりに貰えれば良く、責任が加わるとパニック障害を起こしてしまう嫁。でも、良い子なのです。

いつに間にか二人の乗ったレールは離れてしまい、嫁はそれを修正するより、子育てに追われ、所帯染み、疲れるとお酒を飲んで寝込む月日が続いたようでした。そんな二人の生活の中で長男が新しく出会った女性が、長男には新しい生活への切り札になったようです。

「元テニス世界選手権8位だった子なんだ。爆弾のような子。」

セクシーでエネルギッシュなのでしょう。あー、嫁には勝ち目はないかも。。。。真面目な良い子な嫁を思い、涙が止まりませんでした。新しい人との新しい生活、それも人生では一つの落とし穴のようなものかもしれないのに、義理の長男は一目散に新しいレールを走り始めるのでした。。ドリトル先生も私も、すっかりシャンペンの酔いが覚め、眠れぬ夜を過ごすのでした。苦しむ子供達の批判はせず、いつでも受け入れ、助けてあげるしかないのかもしれないかもしれません。

こうした家族のざわめきの中で、娘は1ヶ月後に結婚し、新しい暮らしが始まっていきます。それぞれの街角で、それぞれの新しい暮しに秋風が吹くことになりそうです。